

6. 思いやりの心が通う街をめざした福祉マップづくり

多摩市福祉マップを作る会
(東京都多摩市)

I. 活動の背景と目的

「障害者にとってやさしい街はすべての人にやさしい街になる」をモットーに、1986年から活動を続けている。活動の中心は障害者が積極的に戸外に出かけることを促し、戸外での活動がスムーズにできるための福祉マップづくりである。最新の多摩市の現況を伝えることを第一に、綿密な実踏調査を繰り返しながら、「障害者用トイレマップ」、「医療機関マップ」、「行政機関及び関連機関等マップ」を作成した。さらにその後、多摩市を3分割し、地域別、駅かいわいマップとして「永山駅かいわい」、「多摩センター駅かいわい」、「聖蹟桜ヶ丘駅かいわい」を作成。93年には自治体の支援を得て、それら6部の既刊のマップを再調査し、改訂を加え、4冊にまとめて発行した。

ところが、改訂版発行後も多摩市の街は変貌が著しく、常に再改訂の必要に迫られてきた。それで、97年度から、あらたに改訂版再発行に向けて、多摩センター駅界隈の調査を始めた。

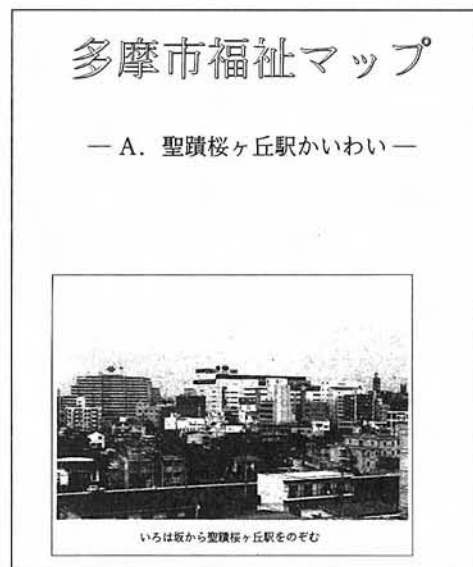
98年度には、(財)ハウジングアンドコミュニティ財団の助成を得て従来の紙ベースのビジュアル福祉マップ作りと平行してパソコン導入による、マップのOA化に着手した。それはマップ作成が簡便化され、そして誰でも簡単に、福祉マップがつけられるシステムづくりでもある。一方、鮮度の高い多摩市の福祉マップを常時全国に発信するためのホームページづくりも進めている。データベースは貴重な街づくりの資料としてやはり、いつでも、誰もが利用できるように整理、保存して残していきたい。

もう一つの我々の活動は住みやすい街づくりへの啓発と直接参加である。街や市の施設については、バリアフリーを推進するための見解や提言、要望を随時提出している。

II. 活動の内容

マップ作成についての検討と多摩センター地区のマップづくり

マップの基本は実踏調査である。多摩センター地区の各エリアを分担し、個々に調査表とメジャーをもって、街の施設や店舗等が車椅子での利用が可能かどうかを主眼として、丹念に調査する。さらに正確を期してイラストに描くためのために写真を撮る。大きな施設や新しい施設等についてはなるべくメンバーがそろって出かけるようにした。多摩センター駅界隈の変化はあまりにも激しいこと、小田急線が唐木田駅まで延伸したことで、エリアが拡大し、各地域の調査事項も増大し、その取捨には苦勞をしている。表記エリアの分割



多摩市福祉マップ

については再考を余儀なくされた。

例会には調査結果を持ち寄って、整理しながら、街の様子を全員が把握する。

そして、より見やすく、使いやすく、携帯しやすいものにするためにイラストや説明文等の表現方法や内容、マーク・記号、体裁についても検討する。同じ地域を10回以上も歩いたり、同じエリアのイラストを何度も描き直して修正するという地味な作業の繰り返しである。実踏調査以外の作業は個人の特性を生かしながら、調査資料の整理、イラスト（絵地図や平面図）、パソコン、ワープロ、説明文、校正などを分担し、その成果についても次の例会の出席者で再検討する。こうして作成中の再改訂版「多摩センター駅かいわいマップ」予定より遅れているが、99年度6月を目処に完成の予定である。



多摩センターのエレベーター
双方向の利用可

マップ作りへのパソコンの導入・ホームページ作成の準備

パソコンをどういう形でグループの活動と福祉マップに生かすかということが今年度の新たな課題となった。このため、今のところ、逆に全体の作業に遅れが出てしまっている。現在、多摩センター地区については、行きたい所をクリックすれば順次、多摩市全体での位置、多摩センター地区の中での位置、さらに拡大イラストでの位置が確認でき、その目的箇所の詳細（業種・アプローチ・入り口・駐車場の有無等）、外観の写真、さらに入り口の拡大写真までを見ることが出来る。既に400件くらいについて入力をすませている。

データベースの蓄積と分析

データベースを蓄積し、街の変化（本当に住みよい街になっているのか）を分析することによって、街の特色が数字とともに明確になる。今後、活用の可能性が大きい。

障害者用施設やサービスの啓発・点検・改善の要望

実踏調査中に障害者用トイレが壊れていたり、障害者が使いづらい施設等を見つけた際には設置者に連絡をして善処や改善を要望している。

多摩センター駅界隈は驚くほど変化の激しい街である。今年度に関しては、京王相模原線多摩センター駅構内に新しく京王クラウン街が誕生した。来年度は立川から延伸しているモノレールが開通の予定である。計画に直接、間接的に関わってきた室内温水プールもいよいよ着工が発表された。その過程についても大きな関心をもって見守って行きたい。

開店した京王クラウン街と改装された京王多摩センター駅はメンバー3人で実踏したが、障害者対応エレベーター、障害者用トイレ、スロープ等バリアフリーへの細かい配慮がみられた。しかし、残念ながら、案内表示が少なく、せっかくの施設の場所がわかりにくかった。特に障害者用トイレは車椅子では使いにくい大きな欠陥があった。そのため、他の京王関係の施設（聖跡桜ヶ丘駅、永山駅、京王デパートなど）に関する質問や要望もまとめ、京王電鉄本社に提出した。本社では広報部が対応して、直接の話し合いをもち、その後各

所よりの解答があるとのことである。今後の改善を期待している。

これからも長く残る市民の共有財産である公共・民間施設等については、障害者が本当に使いやすいものになるように活動を続けたい。期待した新しい施設の障害者のための設備が使いづらかったり、使えなくて無駄になるのはあまりのも残念である。一度できあがった施設の改修や増設は困難であったり、無理が生じ、経済的にも膨大な負担となる。計画段階や施行段階でかかわれるようなればというのがわれわれの願いである。



多摩センター駅前のスロープ

III. 活動の効果及び今後の課題

福祉マップは市内の障害者や希望者に無料で配布されている。このマップがガイドブックになって障害者や高齢者も街に出ることを積極的に楽しむことができればと思う。精密で楽しいマップは障害者が街へでかけるきっかけづくりになったり、通院に、ショッピングにと便利な街の情報誌として一般の方にも好評である。また、福祉マップは全国に先駆けて手掛けたことで、全国の自治体やグループ、個人からの問い合わせが相次いでいて、作成の相談、マップ・調査表の送付等に応じている。

また、我々の活動が理解されて、スロープを設置してくれた医院や、計画段階で問い合わせがあり、我々の助言を入れて、使い勝手のよいスロープ、障害者用トイレ、障害者対応駐車場を設置した民間の葬祭場もある。公共施設では「関戸公民館」に増設されたエレベーターや障害者用トイレについては施行前に問い合わせがあり、一階と4階にある障害者用トイレを左右反転タイプにすることで、より多くの障害者に対応できるという要望が実現した。また、複合施設「ベルブ永山」においても、施工中に見学をし、視覚障害者用ブロックや階段とスロープの位置等についての提言が受け入れられ、一部改善された。施工者側がただ建築基準をクリアしさえすればいいというような意向でないとしても、



パソコン上でマップを見るメンバー

いま少し、障害者自身の声を聞くなり、実際に設置される予定の機器の使い勝手について関心をもっていただければと考えずにはいられない。また、障害者自身にもっと直接、要望や要求の声をだしていただきたいというのも我々の希望である。

福祉マップについては将来的には紙ベースからホームページのマップへ移行することを念頭に置いてさらにOA化をすすめた。これまでに作成している紙ベースのマップは、すべてが手作りで、温かみがあり、優しい気持ちになれる等の評価

が高い。しかし、手作りゆえに多くの労力と時間が必要であり、変化の激しい街に対応が難しくなっている。現実に手書きができる人がボランティアのスタッフとして見つからないこと。絵や図面の描ける人に負担が集中していること。試作に時間がかかることなどが問題点である。パソコン利用は、その労力と時間を短縮できるとともに、変化をリアルタイムで修正できるメリットがある。現在はメンバーの中にも機械的な表現や文字に抵抗感をもつ人もあり、パソコンの普及や使用はまだまだ少数であるので、過渡期という認識のもとに当分の間は、双方の良さを活かした形で冊子とホームページの両立を考えていくことになる。

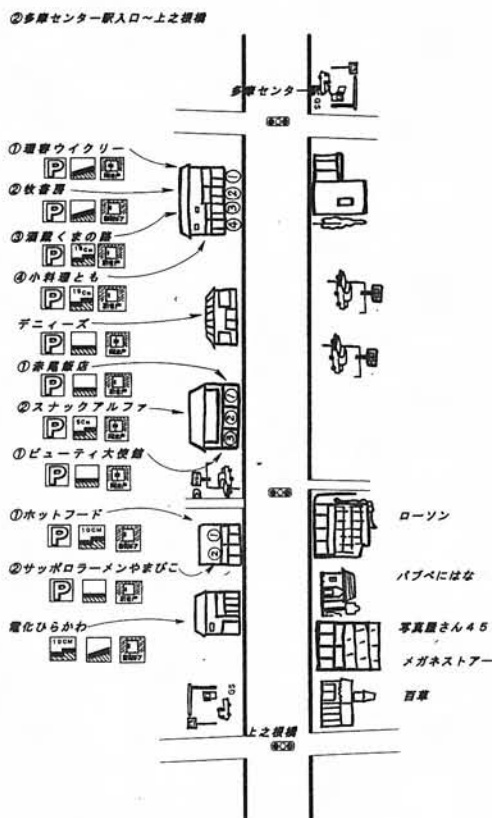
もっともホームページ作成にも難問は多い。イラストやカラー写真を多用したいが、容量が大きすぎて、利用に時間がかかり、また経費もかさむ。

実際、公開してからのランニングコストについてはまだ、見当もつかない状態である。現在はCDを使うことなどを検討しているが、何しろ、我々はパソコンについての経験が未熟で、その利用は経験者や仲間の知識や援助に助けられている。これからも多くの方の支援をお願いしながら、工夫を重ねたい。

データの蓄積という部分ではパソコンは威力を発揮していて、例えばニュータウン通りには量販店が多く、これらの店は車椅子での利用が可能であるが、近隣商店街には身の回り品の販売の店が多いが、店の規模が小さく、車椅子での利用が難しいとか、新規出店は大資本によるチェーン店か小規模のラーメン・美容院・クリーニング取次店などに二極化しているなどといった最近のニュータウンの傾向をパソコンのデータベースから読みとることが可能だ。

マップ作りを通して、多摩市のサロン大学のバリア探検隊との共同作業を試みたり、都立大学史学部の大学院生と知り合い、パソコンのデータ整理の方法を習うなどネットワークの広がりも楽しみである。

早く作るよりもより良いものを生み出す理念に時間をかけてきたのがこのグループの伝統といえる。バリアフリーに関心が高まり、障害者のための配慮や設備も10年前とは隔世の感がある。障害者の方を街でみかけることも随分多くなってきたが、「しかし、まだまだ、もっと……」と粘り強く、欲張りな我々の活動は福祉マップのいらない街になるまで続けたい。



多摩センター付近マップ